

5. 三木町の若連中(三木町)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, ちひろ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4881

5. 三木町の若連中

今野 ちひろ

- I はじめに
- II 若連中
- III 女若連中
- IV 預金講
- V おわりに

I はじめに

三木町には、若連中という独特の年齢別集団組織が存在している。この若連中とは、学校の学年で2ないし3学年にわたる同年代者がひとつのグループを作るもので、この集まりは大人になってからも存続し、集団ごとに様々な活動を行っている。私は、今回の調査で、若連中という三木町独特のグループにとっても興味を持った。若連中が昔と今とではどのように変わったのか、また、男性と女性とでは関わり方がどう違うのかについて比較、考察してみたいと思う。

II 若連中

ここではまず、現在50～70歳代の男性の若連中について取り上げてみる。

この時代までの若連中には、「宿」があり、それぞれ「～若連中」というように、宿を引き受けた家の名字を使って呼んでいた。彼等は、小学校の2学年から3学年にわたる、8～10人で1グループを形成し、小学校2年生くらいから宿探しを始める。宿になってくれる家には、子供が自分たちで頼みに行く。この時、親は子供にアドバイスを与え、子供はそのアドバイスにそって自分たちで、宿になる家を選ぶのである。

宿になる家に共通した特徴は、「信頼ある家」、あるいは「大広間のある中以上の家」という点である。宿の親父は子供達の教育に強い権力を持っていて、子供達は、宿に集まって宿の親父に社会的しきたりから、性教育まで教わる。子供達にとって、宿は大切なしつけの場なのである。よって、宿になる家は、当然評判のいい家、この家なら大丈夫だという家を選ばれることになる。

では、「大広間」はなぜ必要なのか。子供は、宿でしつけの他にもう1つ教わることもある。それは、縄をなうことである。子供達は、冬の間は縄ないや、むしろ織りを教わるのである。8～10人の子供が集まって、縄ないができるように、大広間のある家を選ばれるのである。また、オヤケの家（財力のある家）ではやらないのは、オヤケの家には、「畳がしいてあって縄をなえないから」（A氏）である。このように宿としては、中くらいの家で、茅葺き、むしろの敷いてある家を選ばれたようである。しかし、子供の教育という重要な場であるから、家の規模よりも、

やはり信頼の持てる、世話好きな家ということが第1条件であったようである。

このようにして選ばれた宿で、子供達は、学校の帰りに寄ってわらじを編んだり、縄をなったりしながら様々な話をし、また仲間とかくれんぼや野球をしたりして遊びながらいろいろなことを学んでいったのである。「油揚げと米を宿へ持って行って、ご飯を炊いてもらって食べるのが楽しみだった」(B氏)、「宿の迷惑にならないように山へ行って薪を持っていった」(C氏)という話もきかれる。また、春、秋の「カクセツ」では、みんなでごちそうを食べる。「春は小川から魚を捕ってきて、秋には果物をとってきて食べる」(A氏)、さらに、大年(おおとし)と呼ばれる大晦日には、盛大なおよばれがあり、みんなで宿に集まって一緒に正月を迎える。このように、当時の子供達にとって宿は1つのコミュニケーションの場であり、とても重要な役割を果たしていたといえる。子供達は、宿でしつけ、教育を受け、さらに若連中仲間である友達や、宿の親父と情報を交換し合い、いろいろなことを吸収しながら成長していったのであろう。

しかし、若連中が宿に寄って集まるのはある一定の時期までである。現在70歳代の人達の場合は、結婚後は宿に寄ることはなくなったという。また、現在60歳代の人達の場合、高学年になると宿には行かなくなったということである。

宿に寄らなくなった後、宿との関わりはどうなるのだろうか。若連中と宿とはそこで全く切れてしまうのではない。宿に集まっていたときほど頻繁な交流はなくなるが、結婚式や葬式のときには集まって手伝いをする。

若連中のことについて聞くと、どの人も、「宿に寄るのが楽しみだった」などと、嬉しそうに、また誇らしげに語ってくれる。とくに、「若連中は、平等なのがいい。カクセツの費用も平等だし、差は無かった」(A氏)という話が印象的だった。家柄など様々な社会的な格差がまだ残っていた時代に、宿による若連中仲間の間では互いに同じレベルで気軽に接することができる。若連中は、まさにかげがえのない友達仲間であり、そこから強い団結意識が生まれてくるのである。

そうした、宿を基盤にして結成された若連中は、現在でも若連中としての集団意識は依然として強く、仲間の身内の冠婚葬祭の手伝いには必ず出るという。「葬式の時は若連中で世話をする。本人がいなくても、息子など家の人が若連中仲間の最後の1人まで面倒を見る」(B氏)という話にあるように、若連中仲間としてのつながりは非常に強いもので、その家族も同様に協力する。また、祝いごとなどがあると、その手伝いで昔の仲間が久し振りに集まるので、帰りに一杯という楽しみもあるという。

このような冠婚葬祭の手伝いの他の主な活動としては、会費を集めてひと月に1回温泉に旅行するという若連中もある。これは、家族ぐるみのもので、家族も一緒に若連中の行事に参加する。このように、女性は結婚すると、夫の若連中の行事に参加することが多くなるようである。さらに、何か月かに一度、会合を開いて仲間同士で、情報交換しているというグループもある。

宿に寄らなくなっても、旅行をしたり会合を開いたりして、若連中同士のコミュニケーション

ンはきちんととられているといえるだろう。「年は取っても、名前は若連中や(笑)」(B氏)というように、いつまでも昔の仲間を大切に、その仲間と会う機会を作るということは、とても大切なことではないだろうか。

また、若連中仲間で協力して、御木神社への寄進を行ったグループもある。御木神社は、三木町に住む人にとってまさにシンボルのような存在であり、祭りや初詣で、厄年払い、戦没者のお参りなど三木の人の生活とは切っても切り離せないものであった。その御木神社に自分たちで寄進をし、名前を残そうという活動には、彼等の三木町に対する強い愛郷心がうかがえる。この「愛郷心」がより一層団結を強めているのかもしれない。

若連中の活動は、それを見ながら育ってきた彼等の息子達の世代に少なからず影響を与えているといえる。宿のあった時代に若連中としてグループを組んでいた人達よりもさらに若い世代の人達は現在、預金講とよばれるグループを形成している。預金講については、後に述べる。

Ⅲ 女 若 連 中

三木町には、前節で述べた男若連中があった時代、女性にも同様の女若連中というグループが存在した。女若連中は、男性の若連中とグループの人数や、年齢構成についてはほぼ同じである。しかし、男性の若連中が「～若連中」というように宿の名字をつけて呼んでいたのに対し、女若連中は特に名前を持たなかったようである。

女若連中も男若連中と同じく宿があり、その宿に寄って針仕事などを教わる。また、大年には、餅を持って集まり、囲炉裏で餅を焼いて一夜を明かし、正月にはカルタやトランプ、百人一首などをして遊んだという。女性にとっても、男性と同じ様に宿はしつけや教育をしてくれる場であり、また、仲の良い友達との大切なコミュニケーションの場であったのである。

さらに、女性の場合、20歳くらいの結婚適齢期になると「上参り」といって京都にお参りにいく。これが女若連中としての最後の活動であり、この上参りが終わると解散する。

このように、女性の若連中は結婚前までということが多く、結婚後の活動はほとんど無いといえる。これは、男性は結婚してもその土地に残ることが多いが、女性は三木町以外に嫁に行くということもあり、なかなか集まる機会が作りにくいということや、また、前節でも述べたように夫の若連中の行事(家族ぐるみの旅行など)に参加することが増え、夫の若連中の方に入ってしまうという理由によるものであると考えられる。しかし、外に嫁に行った人でも葬式の時には必ず戻ってくるという話も聞かれるし、現在でも、何か月かおきに旅行に行っているというグループもある。やはり、女若連中仲間にも、男若連中ほど強くはないが仲間としての絆があるのではないだろうか。

三木町では、1945(昭和20)年頃までは集落内での婚姻が多かった。町の外へ嫁に出る、及び外から嫁が来るというパターンが一般的になるのは戦後になってからである。結婚は多くの場合

が見合い結婚で、家同士のつりあいや親の付き合いなどから親や周囲の勤める相手と結婚することが一般的であった。しかし、恋愛結婚もまれにあり、恋愛結婚は「なじみぞい」と呼ばれていた。男若連中と女若連中がなじみになることも時々あったようで、その中でごくまれに結婚する人もいたようである。男若連中と女若連中の交流については、「時々、向かいの家(宿)の女若連中をこっちに呼んで一緒に遊んだ」(A氏)、「正月などに、女若連中と遊ぶことはあった。今でいう、合コンのようなもの」(C氏)という話からもわかるように、その機会は多くはないが交流はあったようである。

戦後になって、三木の女若連中の活動も少なくなっていく。このように見ると、女若連中の盛衰は三木の女性の結婚の変化と非常に強く関わっていると考えられる。現在、三木に住んでいる若い女性の間には女若連中のような集団組織は全く見られない。男性の若い世代の人達は、預金講と呼ばれるグループを形成しているのに対し、女性には特にそういったグループは見られない。女性だけのグループではなく、夫の預金講の活動に参加していることが多い。もともと女若連中というものは結婚前の三木の女性の組織であり、三木で生まれ育った女性を対象にしているものである。だから、三木以外で生まれた人が多い現在の三木の既婚女性の間にはそういったグループがないということは当然とも言える。

三木町の場合、男性は結婚後も三木に住み続ける割合が非常に高いが、女性の場合は多くが三木町の外に出ていくという傾向が見られる。このような婚姻の変化、男女の三木に残る割合の差が女若連中と男若連中の現在に反映しているのではないだろうか。

IV 預 金 講

II節でも述べたように現在40歳代、あるいはそれより若い世代の男性は預金講と呼ばれるグループを形成している。預金講は、若連中と同じく2～3学年にわたる8～10人で1グループを形成している。若連中の場合は、小学校2年生くらいからグループを形成し始めるのに対し、預金講の場合は結婚後に形成されることが多い。

三木町には、男性の地区組織として青年団、愛郷会、むつみ会、老人会という組織があり、これらの組織にはその年齢になると半強制的に参加することになっている。それに対して預金講は、主に青年団、あるいは愛郷会の中でサークルのようにして作られることが多い。「青年団は人が多すぎるから、自然と気の合う仲間同士でいくつかグループに分かれて会を作る」(D氏)というわけである。従って、預金講を組まない人もいる。

預金講を組む人は、同年代の仲のよい仲間と会を結成し、自分たちで自由に「～会」という名称をつけている。「どうしてそのような名前にしたのか」と聞くと、それぞれの名前にはきちんと意味があり、その由来を誇らしげに語ってくれた。例えば「イヌワシ会」という預金講グループは、「戌年」と「酉年」の人達が集まって結成されたグループであり、さらに県鳥である「イ

ヌワシ」にかけてある、というわけである。名前の由来を聞くとその会に対する会員の深い思い入れが感じられる。

預金講の活動としては、若連中と同様にコミュニケーションのための飲み会や会合が主であるが、若連中と最も異なるのは、「宿」がないということである。預金講の場合は、2カ月に1回程度、特定ではなくもちまわりで仲間の家に集まったり、あるいは飲み屋で飲むことも多いという。また、会費を集めて年1回家族ぐるみで温泉旅行に行ったりもしている。

このように彼等は自分たちの独自のスタイルを作り出し、自分たちなりの活動を行っている。しかし、活動内容や方法は異なるが、若連中の活動は現在の預金講のなかにまだ生き続けているのではないだろうか。宿の有無の違いはあるが、若連中も預金講も心の許せる友達の会であり、大切な情報交換の場であるという点では共通している。「昔はみんな農家だったが、今はそうはいかない。同じ所に住んでいても顔を会わす機会がなかなかない」(E氏)、「昔は道を歩いていてばったりということもあったが、今は車なのでせわしない」という話からも、預金講の集まりがいかに重要な情報交換の場であるかがえる。また、若連中と同様に預金講も冠婚葬祭の手伝いをして、互いに助け合っている。「親類は県外にいるので、預金講の方が手伝ってくれる」という声も聞かれた。

若連中として集まっていたのは現在50~70歳代の人達であり、預金講は現在40代あるいはそれ以下の人達である。前にも述べたように、預金講は結婚後落ち着いてから結成されることが多いので、若連中と預金講の結成との間には20~30年の空白があったことになる。この間、子供達は親が若連中として集まっているのを見ながら自分たちも何かグループを組もうと思ったのではないだろうか。自分たちも三木町に住む一員としてのしっかりした自覚を作り出そうとしたのではないか。そのことは預金講の活動に現れている。若連中がしているように御木神社にみこしを奉納したり、三木町の中に住む者同士、冠婚葬祭のときなど互いに助け合っている。

このように考えてみると、預金講のむすびつきを最も強めているのは、三木町という自分たちの故郷に対する「愛郷心」、強い地元意識ではないだろうか。それは、預金講が結婚後、少し落ち着いてから結成されるということからも考えられる。三木の土地で結婚し、三木にずっと住み続けるという同じおもいをもった仲間が団結して1つの会を結成し、互いに助け合っていく。昔は農家が多く、みんな三木の中にいたため、いつでも集まることができた。しかし、現在は仕事が忙しく寄ることも難しくなってしまった。また、会社や学校で他の地域に行き、そのまま帰ってこない人も増えている。そのような生活の変化のなかで、三木を誇りに思い、自分たちで守っていこうという思いが会の結成の背景にあるのではないだろうか。そのような愛着が、若連中が少なくなった後で預金講という組織を復活させたのではないかと考えられる。若連中から預金講へ形態は変わっても、そこに受け継がれているものは変わらず残っているし、また残して行かなくてはならないものなのではないだろうか。

1995年に当研究室が調査した黒崎町には「つれ」という組織があった。この「つれ」は3歳ごとに組を形成するもので、生まれたときにはもう自分の入るつれは決まってしまう。このように三木の若連中の場合とは結成の仕方が異なるが、組織としての活動は「カクセツ」に集まって宴会をしたりする1つのコミュニケーション、娯楽の場であり共通している。また、黒崎のつれは、現在ではつれのなかでも同年の者だけで集まることが多く、このグループを預金講と呼んでいることもある。彼等は、会費を集めて旅行したり神社に奉納したりという活動を行っており、その活動は三木の預金講と非常に類似している。

黒崎町の男性は、三木と同様に結婚してからも土地に残る傾向が強い。この地元意識の強さが黒崎のつれ、三木の若連中、そして預金講の活動に影響を与えているのではないだろうか。会を結成するにも、その後集まるにもだれかが言い出さないと始まらない。現在では、仕事もバラバラで顔を合わせる機会も少なくなっている。昔より、自分の住んでいる所に対する興味も薄れつつあるのではないか。そんな中で同じ意識を持った人がいかにその町に残っているかということが大切なのではないか。今回の調査において、三木町には「三木」を誇りに思っている人が非常に多いということがとても印象的だった。そして、その思いは若連中の世代から預金講の世代へと受け継がれている。自分の故郷を胸を張って自慢できるということは素晴らしいことだと思う。私は、日々の生活の中で私たちが忘れかけていた大切なことを教えられた気がする。